

真つ白な嘘

村上春樹

僕は嘘をつくのは得意ではない。でも嘘をつくこと自体はそれほど嫌いではない。変な言い方だけど、つまり「深刻な嘘をつくのは苦手だけど、害のない出鱈目を言うのはけっこう好きだ」ということです。

昔、ある月刊誌で書評を頼まれたことがある。僕は本を書く人間で、批評する人間じゃないから、書評ってできればやりたくないんだけど、そのときは事情があつて、「まあいいや、やりましょう」と引き受けた。でも普通どおりにやつても面白くないから、架空の本をでっちあげて、それを詳しく評論することにした。実在しない人の伝記の書評とかね。これはやつてみると、なかなか愉快でした。でっちあげをするぶん頭は使うけれど、本を読む時間は節約できる。それに取り上げた本の著者に「あの野郎、ろくでもないことを書きやがつて」と個人的に恨まれたりすることもありませんね。

この偽書評を書いたときには、あとで誰かから「ろくでもない嘘をつくな」という苦情の手紙とか、「どこに行けばこの本が手にはいるのか」といった問い合わせが来るんじゃないかと覚悟していたんだけど、一通も来なくて気が抜けたというか、まあそれはそれでほっとした。結局のところ、月刊誌の書評なんて誰も真剣に読んでないんだらうという気もしなくはないんだけど、どうなんだろうね。

それから、今はわりにまじめに答えているけど、生意気盛りの若い頃は、インタビュでもしばしばいい加減なことを言っていた。どんな本を読んでいるかときかれて、「そうですね、最近さいきんは明治時代の小説をよく読んでいます。初期言文一致運動しよぎげんぶんいっちゆうんどうに関わったマインナーな作家さつかが好きで、具体的に言うと、牟田口正午とか、大坂五兵おおさかごへいなんかの作品さくひんは、今読んでも刺激的しげきてきだと思おもいますよ」とか答えたりしてね。

もちろんどっちの作家も実在しない。完全なでっちあげである。でもそんなこと誰にもわからない。僕はそういう口からでまかせのことをすらすらと並べ立てるのがわりに得意です。得意というか、苦勞くろうがないというか。

日本語では「真まつ赤かな嘘うそ」っていうけど、どうして嘘は赤いのか知しってますか？ 奈良なら時代の日本にほんでは、悪質あくしつな嘘うそをついて世間せけんを惑まどわせた人には、赤あかい大福餅だいふくもちを12個こくち口に詰つめ込んで窒息死ちっそくしさせるといいう酷むごい刑罰けいばつがああったからです——といいうのは例れいによよつて嘘うそだ。どうして嘘うそが赤あかいのか、昔むかしから気きにななつていて、いつか調しらべようと思おもつていたんだけど、この数すうじゅうねん十年じゅうねんずつと忙いそがしくて手てがはなせなくて（嘘うそつけ）まだ調しらべてない。

英語えいごには white lie といいう言葉ことばがある。これは「罪つみのない（方便ほうべんの、儀礼ぎらい的てきな）嘘うそ」のことです（これはほんとう）。文字もじどおり「真まつ白しろな嘘うそ」。僕ぼくの嘘うそはどどちかといいうところところに近ちかい。害がいはない、と思おもう。だだつて赤あかい大福餅だいふくもちを12個むり無理むりに食たべさせられられたりししちゃ、たたままらないものものね。